

## 「新しい学校づくり」をめざして～開かれた学校、今、学校に求められるもの～

O先生

五十嵐農場 五十嵐 清彦氏…… 1

## 発信 ～センターは 今～

16年度教育調査の概要	教育調査チーム……………	4
学校の自己評価と外部評価	学校評価研究チーム……………	6
子どもの学びを支援するシラバスの研究と開発	カリキュラム研究チーム……………	9
授業でITを生かすために(2)	情報化推進研究チーム……………	12
受講者の感想で綴る情報教育講座	情報教育チーム……………	16
実践 学校教育相談 「困ったときに元気が出る生徒指導の発想」 ～出来ていないことから出来ていることへ、解決志向でリソース探し～	教育相談チーム……………	18

## 特集

平成16年度福島県教育研究発表大会	……………	22
-------------------	-------	----

## 人・道・歩み

暮らしの中から心穏やかな作品を創る 陶仏・墨絵作家 木村信子氏 に聞く	……………	28
-------------------------------------	-------	----

## 長研究生だより

長期研究を終えて 広野町立広野中学校 教諭（平成15年度長期研究員）猪狩 孝……………	……………	29
--	-------	----

## 研修の風景

専門研修から	……………	30
--------	-------	----

## 随想 テレビ

教育センター次長 石橋 光一……………	……………	31
---------------------	-------	----

## 豊かな教育実践

PCを活用した教材作成 ～資料を読み取る力をつける学習教材の作成～ 河東町立河東第三小学校 教諭 棚木 清人……………	……………	32
---	-------	----

## 授業に生きる資料

学校での箏・三味線の取り扱いについて～楽器の借用を踏まえて～ 教育センター教科教育チーム 指導主事 石川 千穂……………	……………	34
---	-------	----

## おしらせ

実践に役立つ教育資料 ～最近の研究紀要・資料から～	……………	36
平成17年度専門研修のご案内		

# 「新しい学校づくり」をめざして

～開かれた学校、今、学校に求められているもの～

## 〇先生

五十嵐農場

五十嵐 清彦

昭和39年、その年東京オリンピックがあった。

もはや近所で出稼ぎに行くという噂も聞かず、小学校6年生の私はただ毎日を遊びに費やしていた。

それは朝も例外ではなく、寝ぐせの突っ立った頭のまま、メンコ・ビー玉・馬乗り等々、登校前の一時でさえ疎かにしなかった。そして手のかじかむ季節ともなれば焚き火で焼石を作り、それをクルッと手拭いに包み、そのままポケットで「暖」を楽しんだ。ついで路肩の草むらに白く震えるトンボなど見つけると、息を吹きかけ空中に蘇らせたりした。そうこうして他所の集落の子どもたちと顔を合わせる頃ともなると、冷たくなった小石を潔く棄て、いつもの校門をくぐるのだった。

そんな、慌ても急ぐ必要もなかった時代は同級生が多かった。だから、とりわけ勉強ができるでもスポーツ万能ともいえない少年にとって、昼は「遊び」、夜となれば「テレビ」が必須アイテムであった。特に魔法箱のようなテレビは大好きといってよかった。娯楽の少ないその当時、毎日、映画館の気分を味わわせてくれるテレビは最高のご馳走であったのだ。それは居ながらにどこか知らない鎮守の祭に酔いしれ、時に「ジャングル」という

密林で、大蛇や猛獣と遭遇するチャンスを与えてくれた。そんな楽しみは、どんどん夢を膨らませていた。

### 「鍛錬」

その当時、〇先生が担任であった。

まだ30歳前半だったか、メガネをかけ丸顔の先生はオツムが広く光っており、あだ名は「イモ先生」。その名の通り、よく授業中に芋煮会をやった。そんな段取りはすべて我々……。そしてまた時々、脇腹の戦争のキズなど思い出したように披露するのだった。

こんな「よく遊び」「よく学ぶ」を実践する先生は、いつも教室の隅から細い目を光らせ、子どもたちをじっと観察していた。

そんな〇先生にそっと背中を押されたことがある。

当時、私は校内の「健康部長」などをしていただけだが、元来引っ込み思案でよく損な性格と言われ続けてきた。入学の時など翌日から登校拒否をしたくらいである。しかしその件では、必死に逃げ回っても鬼の形相の父や母から逃れる術はなく、強引にオートバイや自転車に乗せられ毎度の通学となるうちに慣れてしまうのだが、小さい体に集団への「恐怖

## 「新しい学校づくり」をめざして——— ～開かれた学校、今、学校に求められているもの～

心」があったからであった。(教室は恐ろしい動物園に見えたものだ。)

いつの間に、そんな性格を先生は心配されていたのだろう。思わぬことをするハメになった。ある日突然、全校児童でやるラジオ体操の時に皆の前に立って模範演技をやれというのだ。それも、校長先生が挨拶する、あの演台で、だ。急な指示に心臓はパニック。緊張でロボットの動きをしながらシブシブ台上に立った。まずは「気をつけ———！」と号令をかけるのだという。皆、シーンと自分を見ている中、口をパクパクしてみたものの、声が小さいという理由でいつまでも同じことをさせられるのだった。もう憎しみと不安が入り混じり、「どうにでもなれ」とばかりヤケになって叫んでみたら、ようやく許しがあつた、体操に移ることができた——。体操になれば今度は得意分野であり、違和感なくスンナリと終えホッとするのだった。しかし、何かひとつとごみみたいな滑稽な場面で、今思い出しても恥ずかしさが込み上げてくるのである。結局、次の週からもこれは繰り返されちよっぴりずつ自信らしきものを植え付けられて行くのだが、この初日だけしか記憶にないのは面白いというしかない。

### 「寛容」

そんな先生に心配をかけてしまったこともある。

あれは秋のことだ。学校には裏山が続いており、そこはキノコや栗やアケビの宝庫であ

った。そんな誘惑に負け、ランドセルを昇降口の下駄箱前に放り投げ、友達のKと一目散に山へと駆け出していた。それからというのは、いい香りのする森や、たまに畑を横切り、探検家気取りでずっと奥まで足を延ばし、時間を忘れ夢中になってしまうのだった。

しばらくして気がついた時はもう遅く、急いで学校に戻る頃には暗くなっていた。そんな坂道を転がり降りると、下に校舎の外灯が見え、とそこに黒い人影があるではないか。なんとそれはO先生がこちらを向いて腕組みしたまま、仁王のように立っていたのだった。

覚悟を決め前へ出ると、先生は薄闇の中、怒るでもなく家族が心配しているから早く帰りなさいという旨を語られ、我々は小さくなってスゴスゴ帰宅したというものであった——。

当時先生の通勤は汽車通であり、おそらく、めったに来ない只見線からして最終列車で若松へと帰られたのであろう。

強く叱られて当たり前のところ、諭すように言われたことで、かえってズシンと響いたのだ。

しかし、そんな先生を裏切ってしまった。

### 「後悔」

なぜかあの頃、全国的にプラモデルが流行しており、村の子どもにもその楽しさを味わわせてやりたいと思われたのだろう。ある日、見たこともないような大きい段ボール箱を教室に運び上げて来た。

## 「新しい学校づくり」をめざして ————— ～開かれた学校、今、学校に求められているもの～

なんとそこには、あこがれの軍艦や戦車・戦闘機などの天然色の絵がついた箱がびっしり詰まっているではないか。(その他、女子の好みそうなものもあったような気がするが…)そんなリアルな戦闘光景は、すでに少年たちを英雄に、そして興奮させるには十分であった。それぞれ目当てを手にして品定めを始めた。それから各自注文し、先生は忙しく手帳にメモするのだった。

支払いは後でよく、大きな玉手箱はその後しばらく教室の片隅にあっただろうか。それからというもの、黄色く小さい箱に目が釘付けとなっていた。それは初日に買った潜水艦の心臓部として、どうしても必要なものであったからだ。が、小遣いがもうない――。

毎日飽きずに眺めていた。

それから何日後か、残りを店へ返す日が近づいていた。そんな放課後だった。

その日に限って人気はなく、ついそのマップチモーターに手を伸ばしポケットに入れていた。魔が差すとはこれをいうのだろう。

この後、家に帰っても脈打つ音は強く、小さな箱を目にする度、後ろめたさはついてまわるのだった。



そして30年も過ぎた頃だろうか。

時効とはいえ、そのO先生にこの顛末を話し謝らなくてはならないと思い始めていた。機会があれば、否、機会を作って昔の恥ずべき行為を告白し、先生と自分の胸のつかえを早く取り除きたかったのだ。

それは紛失に関していっさい「追求」しない姿勢を貫いた、先生に対する礼儀と思えてもいた。しかし、そんな矢先だった。

一枚の訃報が届いた。

O先生の告別式のハガキであった。まだ男の平均寿命には遠かったはずなのに、いきなりガンで逝ってしまったというのだ。

葬儀は暑い日、「もう少し…」 「残念…」などと、無念さを秘めた弔辞に埋もれ、いつの間にか終わっていた。多くの人に惜しまれながらも、やはり最後はあっけなく悲しいものである。そんな「別れ」の意味を整理しようとしたが、やはり無理だった。ただ、もうこれで心残りは消えない、とだけ知った。あのO先生への借りを返す「きっかけ」と「ことば」をなくした今となっては、長く大きな宿題を課せられてしまったのだ。

どうやら白衣姿のあの人の影は、あの時のまま、まだまだ離れそうもないようである。

### ■プロフィール

新鶴村生まれ。会津盆地の西側で豚を飼い、米を作るとともにアスパラの有機栽培にも挑戦、四苦八苦を繰り返している。しかし、産直のお客さんからの励まして何とか現在へ。



16年度教育調査の概要

「教育課程（届）調査」

「ふくしまの学習意識」に関する調査(第2年次)

1 「教育課程（届）調査」

(1) 調査の目的

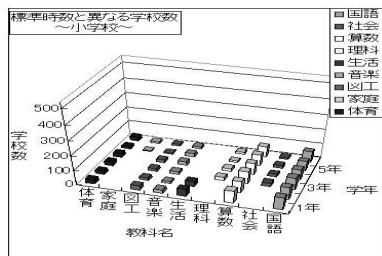
教育課程（届）の内容を調査することにより、学校の自主性・自律性の現状と課題を把握し、工夫された事例を紹介するとともに、カリキュラムセンター開設に向けて条件整備を図る。

(2) 調査結果の概要

- ①調査方法…調査項目に基づく読み取り調査
- ②調査対象…公立小学校(538校)・中学校(240校)、県立高等学校(98校)の教育課程
- ③調査内容…教育目標・編成の方針、年間授業時数、日課表、年間行事予定、年間指導計画他

④調査結果（抜粋）

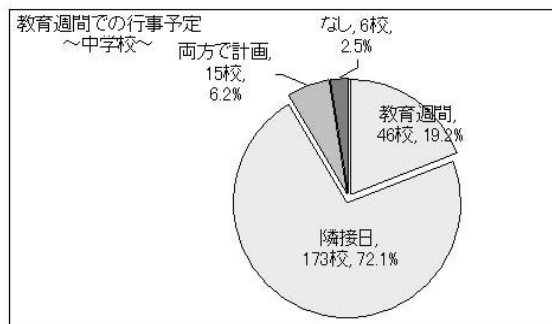
ア 標準授業時数と比較した年間授業時数



小学校で、標準授業時数と異なる時数を設定しているのは国語と算数が多く、

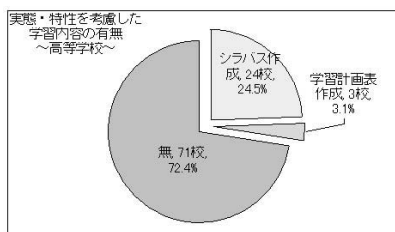
最高は1年と3年の算数の83校であるが、学校総数では15.4%と少ない。標準授業時数どおりの学校が大多数である。中学校で標準授業時数を上回る時数を設定している学校数の最高は13校(5.9%)であり、標準授業時数どおりに配当している学校がほとんどである。高等学校（単位制を除く全日制）で、週あたりの標準時数と異なる学校数は1年で26.9%、2年で28.2%、3年で26.6%であり、週あたりの授業時数で学校の特色を出している学校がある。

イ 「ふくしま教育週間」における行事予定



小学校では94.4%弱の学校で、中学校では97.5%の学校で、高等学校では61.2%の学校で教育週間及び隣接日に学校を保護者や地域住民に開き、県の施策を生かした行事を計画している。

ウ 各教科等の年間指導計画の工夫(実態・特性を配慮した学習内容の有無)



各教科等の年間指導計画から学習内容を読み取ることができた学校数は、

小学校では103校(19.1%)、中学校では62校(25.8%)である。高等学校については、シラバスや学習計画表を作成している学校が27校(27.6%)であり、総合学科や入学説明会等で活用している。

(3) まとめと考察（調査全体を通して）

小学校においては日課表の工夫、中学校においては選択教科の工夫、高等学校においては科目や教科選定の工夫において学校の自主性・自律性が見られる。努力事項等を年間指導計画に反映し、指導の拠り所となるものにしたい。

## 2 「ふくしまの学習意識」に関する調査(第2年次)

### (1) 調査の目的

本県における児童生徒の生活状況及び学習に関する意識について経年で現状調査を行うことによって、本県の課題を明確にし、今後の教育施策に生かす基礎資料とすることを目的として、2年次目の調査を行った。

### (2) 調査結果の概要

#### ① 調査方法

県教育センター作成の調査用紙を使用したアンケート調査を行った。

#### ② 調査対象…抽出校

- ・小学校第3学年児童・保護者1,202件
- ・小学校第6学年児童・保護者1,180件
- ・中学校第2学年生徒・保護者1,148件
- ・県立学校第2学年生徒・保護者1,328件

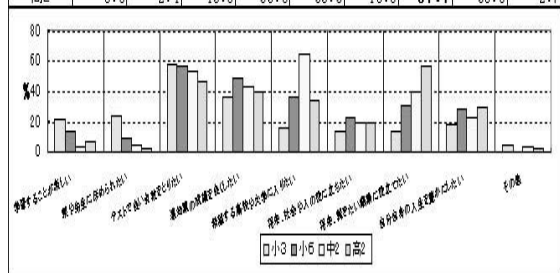
#### ③ 調査内容

- ・生活状況・学習に対する意識・保護者の子ども観・保護者の教育行政に対する要望

#### ④ 調査結果(抜粋)

##### (ア) 学習する目的意識(児童生徒・複数回答)

	学習することが楽しい	親や先生にほめられたりしたい	テストで良い点数をとりたい	通知原の成績を良くしたい	希望する高校や大学に入りたい	将来、社会や人の役に立ちたい	将来、読書や職業に役立てたい	自分自身の人生を豊かにしたい	その他
小3	21.5	24.3	<b>58.2</b>	36.4	15.6	13.0	13.3	17.6	4.2
小6	13.4	8.3	<b>57.1</b>	48.6	36.6	22.5	30.2	28.8	0.5
中2	3.3	4.4	53.8	42.5	<b>64.3</b>	20.0	39.9	23.0	3.0
高2	6.6	2.4	45.8	39.0	33.9	18.8	<b>57.1</b>	30.0	2.7



学習する目的意識では、「テストで良い点数をとりたいから」の割合が、小学3年生と小学6年生で一番多く、それぞれ58.2%と57.1%であった。中学2年生は「希望する高校や大学に入りたいから」の割合が64.3%で一番多く、他の校種に比べてとても多い。高校2年生は「将来、就きたい職業に役立てたいから」の割合が57.1%で、一番多かった。校種が進むにつれ、将来を見据えて学習している様子が見えてくる。

##### (イ) 授業内容が分からない時の対応(児童生徒・複数回答)

	先生に聞く	友達に聞く	自宅で家族に教えてもらう	自分で調べる	そのままにしておく	その他
小3	47.9	36.1	<b>52.4</b>	5.3	9.8	1.7
小6	36.6	<b>61.7</b>	51.5	10.7	6.1	1.5
中2	43.7	<b>63.2</b>	26.3	12.2	11.8	4.4
高2	45.0	<b>73.8</b>	4.5	12.8	16.6	2.4

授業内容が分からない時の対応では、小学3年生では「家族に聞く」が一番多いが、小学6年生と中学2年生、高校2年生では「友達に聞く」が一番多い。「家族に教えてもらう」割合は、校種が進むにつれて減少し、「友達に聞く」「自分で調べる」の割合は、校種が進むにつれて増加している。

##### (ウ) 教科指導に対する期待(保護者・複数回答)

	先生の説明が中心	やり方が選べる	友達と話し合い相談できる	作業や活動が多い	一人でじっくり考えられる	コンピュータを活用	分かりやすい	専門的なレベルの高い	その他
小3	10.8	37.9	23.8	23.5	4.5	5.2	<b>67.1</b>	1.8	2.0
小6	11.2	36.9	22.5	25.8	7.8	6.8	<b>65.3</b>	2.4	1.2
中2	9.4	40.2	16.7	16.7	7.0	8.2	<b>69.3</b>	3.3	2.4
高2	6.9	33.6	14.0	17.2	4.4	14.6	<b>60.8</b>	16.7	1.4

教科指導に対する期待では、どの校種とも「分かりやすい授業」が一番期待している。次いで「意見が取り入れられ、やり方が選べる授業」の割合が多かった。校種が進むにつれ、「先生の説明が中心の授業」「グループで話し合い、友達と相談できる授業」の割合が減少し、「コンピュータを活用した授業」「専門的なレベルの高い授業」の割合が増加している。

### (3) まとめと考察

平成16年度の本県の子ども像の一端として、学習する目的意識をもって授業を大切にしたいと考えているが、実際の学習行動に反映しきれていないという現状を垣間見ることができた。

企画・研究グループ 教育調査チーム

TEL 024-553-3141 (内線14)

e-mail: takizawa.reiko@yg34.fks.ed.jp

# 学校の自己評価と外部評価

県立学校では、平成17年度より外部評価制度が導入される。その前提となるのは学校の主体的な自己点検・自己評価の実践である。

学校評価研究チームは、学校評価モデル事業に参加し、モデル校の取り組みから多くの示唆を得ながら、評価を生かした学校マネジメントのあり方を模索している。(モデル事業概要は、所報ふくしま「窓」No142に既報)

本稿では、

- I 学校評価モデル事業における外部評価のプロセス
- II 自己評価実践事例集(仮題)の概要
- III 平成17年度学校評価研修会の3点について報告する。

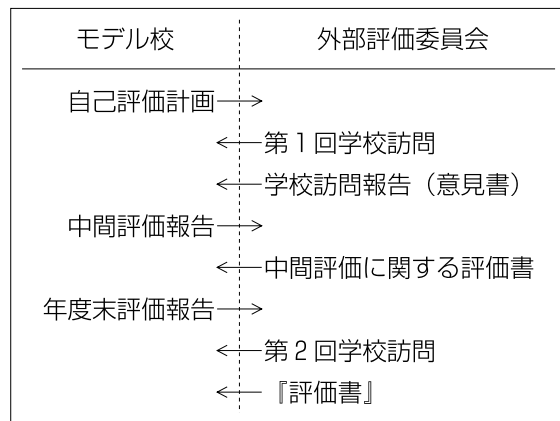
『学校評価の試案』及び学校評価モデル校(県立学校14校)の実践事例は、教育センター Web に掲載されています。ご活用ください。

## I 学校評価モデル事業における外部評価のプロセス

学校評価モデル事業は、学校評議員による外部評価と外部評価委員会による外部評価の2つの研究からなる。ここでは、外部評価委員会による評価プロセスの概要を報告する。

### 1 モデル校と外部評価委員会の情報のやりとり

これまで、モデル校と外部評価委員会は、次のようなプロセスで情報を交換している。



外部評価委員会は、モデル校の自己評価計画・中間評価・年度末評価の3回の資料と2回の学校訪問を踏まえて、各校の『評価書』を作成する。

### 2 学校訪問の概要

学校訪問は、外部評価委員2名による4時間程度の訪問で、概ね次のような内容からなる。

- (1) 提出資料に基づく校長、教頭との協議
- (2) 保護者代表との話し合い
- (3) 生徒代表との話し合い(昼食をとりながら)
- (4) 校内見学(授業見学を含む)
- (5) 教職員代表との話し合い
- (6) 校長、教頭との協議

学校訪問の基礎的な目的は、学校からの提出資料において不明な点を明らかにすることである。さらに、外部評価委員の学校理解を促進することも意図された。

### 3 外部評価の内容

外部評価委員会は、モデル校の自己評価資料及び学校訪問で得られた情報を基に、次の2点

について評価する。

#### ①自己評価の形式・手続き

(保護者等への広報を含む)

②『学校経営・運営ビジョン』に示された重点事項についての組織的な取り組みと改善状況  
学校評価モデル事業の目的は、「学校の自己評価」を評価するシステムを作ることである。『ビジョン』を起点とする自己評価が組織的に行われているか、『ビジョン』を起点とする保護者等への広報が適切に行われているかが、外部評価の観点となる。

#### 4 『評価書』について

外部評価の目的は各校の自己評価の確立を支援・促進することなので、年度末の『評価書』では、一定の基準で評定をつけるのではなく、各校の特色に配慮して評価結果を記述する方法がとられる。外部評価委員会によって作成された『評価書』は、まず各校に送付される。その後、それについての各校の意見及び次年度に向けての対応が付記された上で、公開される。

#### 5 平成17年度外部評価実施に向けて

各校には自己評価の充実に努めることが求められる。具体的には、今年度の年度末反省を基に平成17年度の『ビジョン』を作成し、自己評価計画を修正することなどが必要である。特に、教職員、生徒、保護者等への調査が教育活動の改善につながっているのかについての再確認は大切である。

## II 自己評価実践事例集(仮題)の概要

現在、モデル校の自己評価実践と、研究チームが各モデル校を訪問して得られた情報を基に、実践事例集を編集している。その目次(予定)

と概要を報告する。

### 1 学校評価の目的

『学校評価の試案』では、学校評価は「教育の水準の向上を図るための手段」であり、評価の指標は「生徒の変容」であると説明した。しかし、今年度の研究を通じて、そこに至るためにはまず「学校の変容」が必要であることを強く認識した。

「目的-手段」の関係は、ルーティンワーク化した学校組織の日常の中では見失われやすい。しかし、学校評価により、私たち自らの教育活動の目的を再確認し、諸活動が手段として適切かどうかを見極め、それらを再構築する機会が得られる。モデル校各校の実践においても様々な「学校の変容」が意図された。

### 2 学校評価委員会と学校組織

『学校評価の試案』の提案を受け、校務運営委員会を母体に学校評価委員会を組織したモデル校が多い。

『学校経営・運営ビジョン』作成時の学校評価委員会の典型的な役割は、コーディネーターとしての役割である。学校評価委員会は、校長の方針と校務分掌組織の目標設定を関連させ、『ビジョン』に掲載する重点項目を考える。

また、学校評価委員会は『ビジョン』の重点項目についての評価活動を推進した。その過程では、従来行ってきた校務分掌毎の努力目標評価と、『ビジョン』についての評価とをどのように関連付けるかが大きな課題となった。

### 3 『学校経営・運営ビジョン』

『試案』で示した『ビジョン』の2つの意義、すなわち、

- ①統一的に教育活動をするための指針
- ②情報公開の柱(広報資料)

は、各校において理解されていたと考える。

『ビジョン』が「指針」として共有されるには、適切な作成過程が必要となる。各校では、より組織的で、かつ焦点化された目標設定が試みられた。

公開される『ビジョン』においては、目標と評価のための指標がどのように示されるのかが重要な問題となる。指標を数値化するかなど、意図する目的に応じた目標のあり方について、各校の『ビジョン』では多様な例が示された。

#### 4 自己評価（調査・分析・考察）

外部評価制度の実施にともない、私たちは、従来は混同されることの多かった「評価」と「調査」を明確に分ける必要を感じた。児童生徒・保護者等を対象に実施するアンケートは「評価」として扱われることが多かったが、それを、学校が必要に応じて実施する「調査」と位置付ける。

そのような「調査」に基づいて「分析」及び「考察」が行われる。私たちはこれらの総体が「自己評価」であるにとらえ、学校の主体的な自己評価活動を重視する。

各モデル校では多様な「調査」が実施された。調査を自己評価の手段として活用するには、調査の目的や意図が重要となる。知りたいことや実現したいことを明確にした上で調査を実施することが求められる。

#### 5 広 報

『ビジョン』『実践・改善報告』を柱とする広報活動は、学校評価の重要な要素である。学校評価の取り組みにおいては、校内で共有される情報と校外への広報情報との落差を埋める努力が望まれる。

学校内の情報共有は大切であり、学校の強み、弱みを認識した上で教育活動にあたる必要がある。

また、保護者や地域に対する働きかけや情報提供、外からの情報の取り込みを行うことにより、学校外からの支援と適切な評価を得ることができる。

校内の情報共有により学校を「内に」開き、校外との情報のやりとりにより学校を「外に」開く。これにより、学校は、保護者、地域と共に適切な教育実践をすすめることが可能となる。

#### 6 学校評議員による外部評価

「学校評議員制度設置に関する調査」（平成15年度 県教育センター）によれば、校長が学校評議員に求める主な役割は次の2つである。

- ①地域とのパイプ役
- ②教職員の意識啓発役

本年度のモデル事業を踏まえ、上記の役割をも包括する機能としての、学校評議員による外部評価のあり方を示す。

学校評議員による外部評価は、外部評価委員会による評価とは異なり、学校の主体的な取り組みによって、その質が左右される。評議員への日常的な情報の提供、評議員が学校を見る場の設定、評議員会の運営方法、評議員の意見や評価を学校運営に生かす工夫等が求められる。

### Ⅲ 平成17年度学校評価研修会

来年度、教育センターの専門研修に「学校評価研修会」が加わる。学校評価実務担当者のための実践的な講座であり、各県立学校から1名の参加を予定している。受講者には、各校の自己評価の充実に貢献するファシリテーター（促進者）になっていただきたい。

研修会のテーマは、  
「**楽々ビジョン、さくっと評価!**」です。

# 子どもの学びを支援する シラバスの研究と開発

第142号（7月）において、研究の内容、方法を述べた。本稿では、研究のプロセスについて述べる。

## I シラバスの研究と開発

### 1 シラバスの本質

『現代学校教育大辞典』（ぎょうせい）によれば、シラバスとは一般に「教えるべき学習目標、学習内容、学習方法、指導計画、評価等の概要を示したものの。」とある。

しかし、現在、大学や高等学校で作成されているシラバスは、履修科目の選択の指針や指導計画、進度表の域を脱しきれておらず、また、児童生徒にとって分かりにくく、継続的に活用しにくいものであるように思われる。

シラバスは本来「児童生徒の学びを支援する」ものであり、

児童生徒が、各教科・科目の学習を行うに当たって、主体的・計画的な学習を進める上で必要な情報をまとめた「学習の手引き」

である必要があると考える。

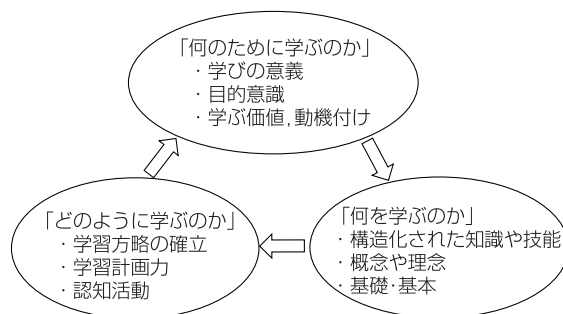
### 2 シラバス作成の意義

児童生徒の学力の現状として、知識や技能などの学習の結果として身に付いた、いわゆる「目に見える学力」以上に、「目に見えない学力」としての学習意欲や学習定着のための学習方略、学習計画力などの「自ら学ぶ力」の低下が指摘

されている。

このことから、児童生徒の「学び」の実態を把握し、個に応じた「学びの自立」への支援として、次の図1に示したように、教科・科目について「何のために学ぶのか」、「何を学ぶのか」、「どのように学ぶのか」という3つの分野についての支援が重要であると考えられる。

図1 学びの3分野



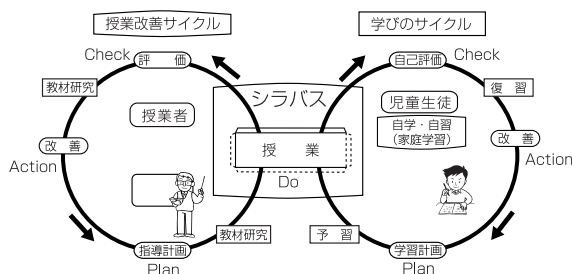
児童生徒の「知離れ」や「学びの自立」の未熟さが問題視されている状況を踏まえ、これらの3分野の視点に立つシラバスを作成し、児童生徒が、意味のある「学び」を見出し、「学びの自立力」(自学自習力)を身に付けるための支援を行うことが大切であると考えられる。

### 3 シラバス活用のPDCAサイクル

シラバスを活用したPDCAサイクルを、児童生徒の「確かな学力」の向上に向けての「授業改善サイクル」と「学びのサイクル」で示したものが図2である。



図2 シラバスを活用した「授業改善サイクル」と「学びのサイクル」



教師の連続的・発展的な「P-D-C-A」により、「授業改善」や「わかる授業」が可能になり、また、児童生徒も連続的・発展的な「P-D-C-A」で、「学びの自立力」が身に付き、「確かな学力」の向上が可能になることを表している。

その際、重要なことは、「授業改善サイクル」と「学びのサイクル」は、それぞれ独立して動いているのではなく、シラバスと授業を介して、リンクし、連動していることである。

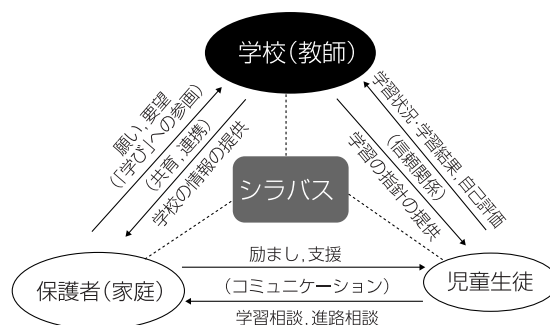
「児童生徒にどのような資質・能力を育てていくのか」を明確にした学校教育目標の達成に向け、シラバスを作成して授業改善がなされることは、同時に、児童生徒が、その目標達成のための行動プランを示したシラバスの活用によって、「学びの自立力」を身に付けていくという相乗効果機能を持っている。

#### 4 シラバスを通した学校(教師)、児童生徒、保護者(家庭)の関係

図3に、シラバスを通した学校(教師)、児童生徒、保護者(家庭)の関係を示した。

学校(教師)がシラバスを示すことは、教師のこれまでの指導内容や指導方法を見直すきっかけになるとともに、児童生徒のシラバス活用による学習状況・学習結果や自己評価、保護者(家庭)の願い・要望などにより、さらなる授業改善が期待できる。

図3 学校(教師)、児童生徒、保護者(家庭)の関係



また、児童生徒と保護者(家庭)の関係では、シラバスの活用により児童生徒への学習相談、進路相談のために家庭内でのコミュニケーションが図られ、保護者(家庭)が学校(教師)とともに児童生徒の「学びの自立」への支援に参画することができ、それにより家庭の教育力の向上を図ることができる考える。

#### 5 シラバスの役割

シラバス作成の意義、PDCA サイクル、学校・児童生徒・保護者の3者の関係におけるシラバス活用による効果などから、シラバスの役割として、次の4つが考えられる。

- ①教師と児童生徒の契約書としての役割
- ②児童生徒の「学び」の道標としての役割
- ③授業計画書と学習の手引書としての役割
- ④事務連絡文書としての役割

#### 6 シラバスの効果

##### (1) 児童生徒のシラバス活用の意識調査

本県の小・中・高等学校の児童生徒501名を対象にシラバス活用の効果を確かめるため、研究協力員に依頼し、「シラバス活用の意識調査」を実施した結果、次の①～④について、シラバス活用による有効性が検証された。

- ①学習目的や学ぶ楽しさの理解
- ②学習内容の理解の深まり
- ③学習の見通し
- ④シラバスと授業、評価の一致

これらの調査結果から、児童生徒が年間シラバスや単元シラバスを継続的に活用することによって、学習意欲の高揚、主体的・計画的な学習の促進が期待できるのではないかと考える。

## (2)教師のシラバス作成・活用に関する調査

教師のシラバス作成・活用による効果を確かめるために、本研究に協力していただいた研究協力員に依頼し、アンケートを実施した。その結果、次の4つの点について、教師のシラバス作成・活用による効果が見られた。

- ①授業改善への効果
- ②児童生徒の変容
- ③教師間における、指導内容の共有化
- ④保護者の理解と協力

## Ⅱ シラバス作りを通じた学校支援

昨年度までの研究成果やシラバスの研究をもとに、「飯舘村立飯舘中学校」と「県立只見高等学校」の2校について、学校の教育的課題やニーズに応えるための学校支援を行った。

両校の生徒に「確かな学力」を保証し、進路目標を実現させるためには、生徒にとって「学習の意義の理解・目的意識の醸成」、「家庭学習の充実」、「主体的・計画的学習の定着」、「効果的な学習方略の確立」が重要になると考え、次の①～②の研究課題を設定した。

- ①シラバス作成を通して、授業改善に役立つ学校支援を行う。
- ②生徒の主体的・計画的学習を促すことができるシラバス作成のための支援を行う。

飯舘中学校及び只見高等学校への学校支援を通して、学校からは、校内研修会や授業研究会、

新たな教育的課題への対応のために、より積極的に関わってほしいという指導主事への期待が感じられた。今後の学校教育の方向を考えた時、指導主事には、教科・科目や「総合的な学習の時間」などで、地域に密着したカリキュラムの開発やその編成と実施に関わるカリキュラムデザイナーの役割が期待されているのではないかと考える。



## Ⅲ 研究のまとめ

### (1)研究のまとめ

シラバス作成・活用により、次のような有効性が検証された。

- シラバスは、子ども自身の主体的・計画的な学習を推進する手だてとなる。
- 子どもの目線に立ったシラバス作成は「わかる授業」のための授業改善に役立つ。
- 子どもの「確かな学力」の向上のために、指導計画との関連を図りながらのシラバス活用が「学びの自立」の促進に役立つ。

### (2)今後における課題

- ①シラバス実践事例の収集・蓄積・データ化と「シラバスライブラリ」の開設
- ②教育センター研修講座において、シラバス作成・活用に役立つ研修の実施
- ③各学校の教育課題やニーズに応じた学校支援

本研究の詳細は、県内各小・中・高等学校へ配布するシラバス作成の手引書（「子どもの学びを支援するシラバスの作成に向けて」）及び教育センター Web ページ（<http://www.center.fks.ed.jp/>）をご覧ください。

## 授業で IT を生かすために(2) ～情報化推進研究チームの取り組み～

第142号において、研究の概要について述べた。本稿ではその後の経過について述べる。

### 1 先進的な学習形態の研究

本県の約50%を占める小規模校では、教員配置等の関係などから技能系の専門領域の指導者の確保が難しく、質の高い授業が実施しにくい状況にある。このような環境の学校においても、ITを活用することで効果的な授業を実施することが可能となる。そこで、学年1クラス、児童10名程度の小規模校を対象に、関係機関等との連携を図りながら、ネットワークを利用した新たな授業形態の実践研究を行った。

#### (1) 研究計画

実践研究は3期に分けて行い、ITによる授業支援をより必要とする学年単学級の小学校を対象に研究協力を依頼した。

学習テーマは、Ⅰ・Ⅲ期は「箏による創作学習」（音楽）、Ⅱ期は「ふるさとの祭り・芸能について探ろう」（総合的な学習の時間）とし、発展的な学習内容として設定した。

なお、研究協力校の選定に際しては下記の点に配慮した。

○Ⅰ期は学校間交流のためにTV会議を活用することから、ブロードバンド対応の学校を対象にするとともに、ふくしま教育総合ネットワーク（以下FKS）のイントラネット上で展開するためFKS参加市町村より研究協力校を選出。

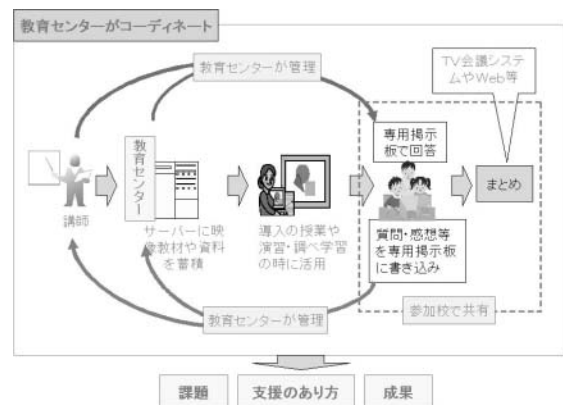
○Ⅱ期は祭りの調べ学習が実施可能な地域を対象にするとともに、祭りの開催が地域によって異なることから夏休みを含めた長期間で展開。

○Ⅲ期については、Ⅰ期で開発された教材の評価を行うことで、より教材の汎用性を高めるため、研究参加校を教育センターWebサイトより募集。

	テーマ	研究校	学年	外部講師	期間
Ⅰ 音楽	「箏による創作」	国見町立小坂小学校	6	遠藤千晶 (箏演奏者)	H16.6.14～ 6.25
		三春町立沢石小学校	6		
		天栄町立湯本小学校	6		
Ⅱ 総合的な学習の時間	「ふるさとの祭り・芸能を探ろう」	二本松市立原瀬小学校	5	懸田弘訓 (大学講師)	H16.7.12～ 12.31
		小野町立浮金小学校	5		
		喜多方市立上三宮小学校	5		
		葛尾町立葛尾小学校	6		
Ⅲ 音楽	「箏による創作」	猪苗代町立東中学校	2	遠藤千晶 (箏演奏者)	H17.1.24～ 1.31
		会津若松市立第六中学校	2		

#### (2) 実施体制

この研究では専門的な知識・技能を有する外部講師の協力を得て授業支援の指導映像や補助教材などを作成を行った。これらの教材を教育センターサーバーに蓄積することで、研究校がいつでも利用できるようにするとともに、児童生徒や担当教員からの疑問などに関して、専門家に指導や助言をいただくことで、学習が深化することを目指した。学校からの質問や意見交流を研究参加校で共有するために専用掲示板を



設け教育センターが運営管理を行った。また、他校における取り組みの状況などを動画等で掲載し、同じ学習テーマで学習している児童生徒が共有できるように配慮した。

外部の専門家と連携することで、発展的学習に取り組むことが可能になり、学習意欲の向上に結びつくと考えた。また、地域を越えた学校が学習内容を共有することで、多様なものの見方や考え方を知り、自らの考察を深める力の育成や、小規模の学校単独では得ることが難しい学習の深まりを期待した。これら全体を通して教育センターがコーディネートし、支援のあり方や教材としての可能性を探った。

### (3) 開発教材

#### ○オンデマンド教材

専門的な知識・技能を有する外部講師の協力による指導映像や補助資料などを教材としてサーバに蓄積し、ネットワークを通して研究校がいつでも学習に利用できる教材を開発。



#### ○教師用資料

学習を進める上で参考になる基礎的知識や代表的な祭りの説明をまとめた教師への支援教材を作成。

#### ○児童用ワークシート

オンデマンド教材と連動した児童の学習ガイ

ダンス・ワークシートをWebサイトから提供。

#### ○関連資料

福島県内の代表的な祭りと民俗芸能の分布マップや祭りに関するリンク集等。

### (4) 各校での実践

各学校の実践は、教育センターより週間単位での進行スケジュールを例示し、各校の計画により実施した。

○「箏による創作」「ふるさとの祭り・芸能について探ろう」ともに、専用Webサイトを立ち上げ、より利用しやすい教材とするため研究協力校の意見を取り入れながら改善を行った。



○学校間の交流、専門家への質問、教師同士の打ち合わせなど、意見交流のための掲示板を学習支援として準備した。学校間、教師間で学習経過を報告などの情報交換が盛んに行われた。

○研究校の取り組みは、随時Webページにまとめられ他校の学習過程を共有しながら学習を進められるよう配慮するとともに、最終的に学習活動の記録・成果としてまとめた。

#### ○TV会議での交流

研究協力校相互に取り組みの紹介、教育センターへの質問

など遠隔交流や情報交換などが行われた。



## 2 学習に役立つポータルサイトの整備運営

国、県などにより教育用コンテンツ等の整備等がこれまで行われてきた。これらの活用を一層推進し、IT を活用した授業改善を普及することを目的にポータルサイトの構築を行った。



### (1) 掲載情報

○授業の中に IT を活用する指導事例を紹介

・ 授業実践事例集

○授業の中に活用できる教育情報の紹介

・ 授業に役立つWebサイト集

・ ふくしま教育情報データベース

・ 単元別 Web サイト集

○実践的授業研究のモデル

・ 先行的研究授業教材

○ポータルサイトに関する意見収集サイト

### (2) モニタリング

各教育事務所より推薦された小・中学校28名のモニターに上記サイトを閲覧してもらい、利用者の視点で掲載情報を整理することで、質の高いポータルサイトにすべく改善に取り組んだ。

#### 【期待できる効果】

- ・ 授業を行う教師側要望の取り入れ
- ・ モニターの意見を取り入れた実践的な研究
- ・ モニターの教育情報の収集

・ モニターを介しての広報

【期間】平成16年10月31日～17年3月31日

## 3 データベースの教材化と授業実践モデルの拡充

10万件以上の膨大なデータについて、教材として利用する視点で目次やインデックス付加、データ構造の見直し等を行い、データベースの検索性を向上させた。さらに、研修等でのデータベース活用演習、データベース活用事例のWeb掲載などを通して普及に取り組んだ。

また、「IT を生かした授業づくり実践講座」「IT を活用した授業の進め方講座」などの研修とリンクし、授業実践モデルの拡充を図った。



地域を学習する教材  
(増島 百也 長期研究員)

## 4 IT 活用研修

### (1) IT を生かした授業づくり実践講座(6日)

学習カリキュラムの設計やプレゼンテーション演習等を通じて、IT を生かしたわかりやすい授業方法を実践的に身につける研修を実施した。



(<http://www.plan2030.gr.fsk.ed.jp/>)

## (2) IT を活用した授業の進め方講座(2日)

「パソコンは使えるけど、授業に生かすにはどうしたらいいの？」そんな疑問に答えるために16年度新規講座として行ったのが、「IT を活用した授業の進め方講座」である。

平成17年1月17～18日に中学校、24～25日に小学校の先生方を対象に実施した。

### ○講義・演習「授業における IT 活用」

情報化推進研究チーム主任指導主事が、基本的な考え方や実践事例を紹介した。



### ○演習「教材作成の実際」

初心者と経験者に分かれて、プレゼンテーションソフトの演習を行った。



### ○演習「IT を活用した授業を構想しよう」

事前に考えた単元計画案をもとに、各教科の指導主事と検討を重ねた。プレゼンテーション



ソフトの使い方を工夫したりコンテンツを探したりしながら、児童生徒にとって「分かる授業」の授業の構想を具体化し、授業のねらいに合わせて効果的に IT を活用する教材を作成した。



作成された教材

### ○発表「IT を活用した授業の発表」

作成した教材を紹介しながら、授業の構想を発表した。



## 5 まとめ

近年、情報ネットワーク等のインフラ整備や教育用コンテンツの開発が進み、IT 利用環境の整備は着実に進んでいるところである。反面、コンピュータは操作できるが、学習指導での利用については自信がないと答える教員は34.2%、約6,200人と IT 普及の対象となる層は厚い。今回の研究を通して、学校が必要とする教材と適切な支援、日々の教育活動に役立つ情報提供等を継続してサポートすることで IT 活用のハードルを低くすることが可能であることが明らかになった。IT 活用を不得手とする教員へ向けて、支援の質を高め、幅を広げることが学校の支援機関としての教育センターの役割である。

企画・研究グループ情報化推進研究チーム  
e-mail jyugyouni it@ml.fks.ed.jp  
TEL : 024-553-3141



## 平成16年度 受講者の感想で綴る 情報教育講座

今年リニューアルした講座を取り上げて紹介します

今年度教育センターで行った情報の専門研修をいくつか紹介します。講座を希望する際の参考にしてください。

### 初心者のための学校 Web 作成講座

本講座は、Web ページの作り方だけでなく学校 Web を作り、運用している講師をお招きして実際の体験を基に質疑を交えながら問題解決を図るという内容の講座です。

特に、Web ページの管理で大切なことは日々の更新です。いつまでも入学式の写真が残っていたり、期限が過ぎたお知らせが載っている Web ページでは誰も見てくれません。そこで実際には忙しい校務の合間でどうしたら更新が頻繁にできるのかといった疑問や不安が出てきます。

本講座では、これらの疑問や不安について、更新を日々実践している講師の方からのアドバイスで解決していただき、活発な Web ページの運営を目指して欲しいと考えています。



研修者の作品

#### <受講者の声>

- 本校ではコンピュータの管理者が毎年代わり、十分な管理運営ができていません。講師の小野崎先生から実践的なお話を伺い、このままではいけないと認識しました。先生のアドバイスをもとに、今後の Web 更新等にあたりたいと思います。
- 小野崎先生の実践している方法、特に生徒に HTML で Web ページを作成させる指導に驚き、またその理由を聞いて感心もしました。「Web ページは見た目より中身だ」という言

葉をかみしめ、今後の Web づくりに努力したいと思います。

### デジタル素材を利用した効果的なプレゼンテーション(表現・技法)講座

昨年度までプレゼンテーション関係の講座は、PowerPoint を学ぶ講座でした。今年度は、更に一歩進んで、プレゼンテーションをもっと効果的に活用できないか、どのように使ったらより良く伝えることができるのだろうか、ということを中心に学べるようにしました。

初日には、普段何気なく撮っている画像や動画をどのように撮影すればこちらの意図が伝えられるかという手法を、デジタルメディアプロデューサーディレクターの澤田正人先生に教えて頂き、2 日目には、プレゼンテーション活用に関する著作もある日本福祉大学教授の影戸誠先生を講師に迎え、より実践的なプレゼンテーション技法について学びました。



講座の様子 (左：澤田先生、右：影戸先生)

#### <受講者の声>

- プレゼンテーションの概念など、講師の先生方に分かりやすく教えていただいた。これまでは、なんとなく「こんなものだろう」と思いながらだったが、これからは明確な目的の方針をもってプレゼン作りに取り組みそうである。学校祭などで生徒の発表があるが、その指導にも役立つ内容であった。

### 実習で学ぶ校内 LAN (構築・運用・管理) 講座

この講座は、校内 LAN を構築する際によく使われる PeerToPeer 型とサーバクライアント型のネットワークを実際に構築してから運用す

るまでの一連の準備や作業、ソフトのセッティングについて学ぶ講座です。今回は、2つのLANの長所や短所、運用方法の違いを中心に学びました。また学校でのLAN構築や日常の運用の際に持った疑問を(株)富士通東北システムズのエンジニア木村弘枝さんにお答え頂き、解決を図るという他の講座では見られない実践的な内容となりました。さらにLANの活用方法としてASPによるアンケートシステムやグループウェア構築の手法を学びました。



ネットワーク構築と外部講師によるQ&A

#### <受講者の声>

- ・ 講師の木村先生の、質問者の理解度に応じた受け答えには感銘を受けた。さすが第一線で活躍するプロだと思った。センターの研修でなければ、このような講師に直接質問できる機会は皆無であろう。
- ・ 3日間と限られた日数の中だったが、ネットワークの構築、ASPの理解とどちらも充実した研修だった。すぐに実践できる内容でもあり、参加してよかったと思っている。ASPに関しては、アンケートの瞬時の集計など、学校で大いに活用できるだろう。



ASPで動作する“こあっと”(左)とアンケート(右)

#### 校務におけるExcel活用 (関数・データベース)講座

本講座はExcel入門を終え、更に校務にExcelを活用したいと考えている方のための講座です。

講座の特徴は、何と言っても実際の校務で行われているようなExcelの使い方を演習問題を解きながら学ぶという点です。特に便利な関数の利用方法や校務でよく利用されるExcelの諸

表簿の作成方法を演習をしながら分かり易く解説しました。

#### <受講者の声>

- ・ 学校では週案や会計簿、学習予定表等、他の先生がつくったものを利用しているが、その仕組みについて理解することができ、有効であった。与えられたものを単に利用することと、それらの仕組みを理解して活用するのでは大きく違うことに気づいた。
- ・ 中級というレベルにふさわしい内容でした。特に事前に自己研修課題があったので、基本操作の知識をしっかりと学ぶなど、自分なりに準備して安心して講座に臨めました。



完成した時数管理表と研修の様子

#### VisualBasic・C++の基礎を学ぶ プログラミング言語講座

この講座は、VisualBasic、NETとC++ Builderの2種類の言語の中から1つを選択し、基礎から応用までを学ぶ講座です。特にVisualBasicは、比較的手軽にWindows上で動作する簡単なアプリケーションをつくることのできるため、学びやすい言語と言えます。

#### <受講者の声>

- ・ 加勢先生のお作りなされたテキストは、これぞプログラミング、というもので、非常に感動しました。VBの楽しみ方を教えて頂いた感じがします。本校の他の教師にも伝達講習をしたいと思います。
- ・ プログラミングの楽しさを実感することができた。特にスロットマシンやお絵かきソフトなどは、生徒も興味を示す題材だと思うので、授業に取り入れたい。

以上、本年度行われた情報教育研修の中から5つの講座を紹介しました。これら以外にも校務や授業に役立つたくさんの講座がありますので<http://www.center.fks.ed.jp/>をご覧ください。

## 困ったとき元気が出る生徒指導の発想

～出来ていないことから出来ていることへ、解決志向でリソース探し～

問題行動に目を奪われて、問題行動を止めさせようと一生懸命指導をすればするほど泥沼状態に入り込んでしまった経験はありませんか。今回は、努力しているにもかかわらず、日常の指導援助がうまくいかない時、あーどうしようと思ひ悩む時、先生も生徒もともに元気が出る生徒指導の発想を紹介します。

## 〈事例〉授業に集中しない晃治君(高1)

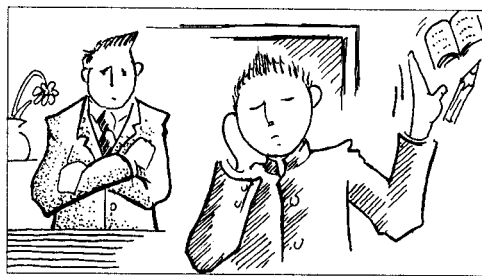
桜満開の入学式も終わり、新入生は新たな生活にかなり緊張気味です。それでも、新入生歓迎の行事や部活の勧誘などが行われていく中で、次第に新入生たちに笑顔が見られるようになりました。

しかし、学年主任で1組担任の佐藤先生(42歳男性 英語)には、入学時より少し心配な生徒がいました。その生徒は2組の晃治君でした。彼は、中学3年の時、友人関係のトラブルから不登校を経験した生徒です。入学式から数日間は特に目立った所もなく、「高校では大丈夫かな」と佐藤先生も安心していました。やがて、授業が始まると、佐藤先生の不安は的中しました。佐藤先生の英語の授業では、周囲の生徒たちにすぐにちょっかいを出したり、そうかと思うと今度は寝てしまったりとなかなか授業に集中しません。指導しても一向に改善しません。佐藤先生は、2組担任の山本先生(29歳女性 国語)に晃治君の様子を伝えました。すると、山本先生は、一瞬悲しげな表情を浮かべ、「やっぱりそうかあ」とつぶやきました。それから、自分自身に言い聞かせるように話し始めました。

「実は、他の教科の先生からも晃治君が授業に集中しなくて困っている。周りの生徒が同

調して授業の雰囲気が悪くなってきているなど、晃治君についての問題がたくさん出され、担任としてどう対応すればよいが困っています・・・。」

山本先生も晃治君に指導はしているのですが、改善の姿が見られないことに焦りを感じ始めていました。また、じっくり話さなくてはと思うのですが、何をどう話していいものか分からず、一步前に進むことができない状態でした。



幸い、数学担当の川口先生(30歳男性)、家庭科担当の小野先生(36歳女性)も、晃治君に関しては、指導しても効果が表れないことへの焦りと、何とかしたいという願いを持っていることが、休憩時間の会話から分かりました。

そこで、学年主任の佐藤先生が中心となって、晃治君への指導援助について話し合う場を持つことになりました。

## 1 援助チームの結成と情報収集

一人よりも二人、二人よりも三人・・・人数は多いに越したことはありませんが、まずはできる範囲でチームを組むことがポイントです。特に、該当生徒を担当する教科担当者は、貴重なリソース（援助資源）となります。情報収集も複数の視点から行うことが出来ます。

## 2 発想を転換し解決像をイメージする

〈問題〉を特定してその〈原因〉を探すことは確かに重要ですが、事態がこう着状態の時には、発想を変えてみることも必要です。問題行動の〈問題〉やその〈原因〉探しにのみ終始せず、その生徒がどんな状態になればいいかについて具体的に解決像をイメージし、話し合いをします。その際、今現在、本人が部分的であっても出来ていることをベースにして「～ができるようになる」といった肯定的な視点でイメージすることが大切です。

## 3 解決像実現のためのリソース探し

解決像のイメージができたならば、その実現に向けて、使えるリソースを探します。無い物ねだりをするのではなく、本人が持っているものや本人を取り巻く環境（教師自身も環境の一つ）の中から実際に使えるものを探すという視点が大切です。

## 4 小さな変化を起こす

解決像がイメージでき、その実現のためのリソースもいくつか探し出せたところで、いよいよ具体的な援助方法を考えます。初めは、生徒に小さな変化を起こすことに焦点をあて、今と異なれずできる具体的な援助を実際に試してみることが大切です。もしうまくいかない場合

には、また別の援助を試していきます。その際、それぞれの先生が持ち味を生かし、自分の得意な側面から働きかけることがポイントです。

## 5 成功例を活かす

なぜうまくいかなかったのかという反省や考察にとらわれすぎず、うまくいっている援助について、なぜその援助がうまくいったのかを話し合います。成功の理由を振り返り、次の援助にそれを活かしていきます。

## 6 解決志向による援助例

### 〈援助チームの結成と情報収集〉

主任 忙しい中、有り難うございます。今日は、担任の山本先生と教科担当の川口先生、小野先生に集まってもらいました。まずどんな点が気になるか話を出してみてください。

川口 ともかく、授業中落ち着きがないんですよ。

小野 家庭科の時間も座学は厳しいですね。

山本 国語の授業でもすぐに周りの子たちにちょっかいを出しますね。

川口 クラスではどんな様子なのですか？

山本 行動が荒っぽいというか・・・。家庭環境も少し複雑なようですし・・・。中学時代にもいろいろあったようです。

〈中略〉

### 〈発想を転換し解決像をイメージする〉

小野 でも、家庭科の実習の時は、別人のようにここにこして作業していますよ。

山本 あっ、そういえば、女の子には親切なんですよ。

主任 そうか、出来ていないことばかりではないんだね。

川口　　そうですよ。出来ていないことを挙げて  
も、必ずしもいい方向に向かうわけでも  
ないし。時には、なんか暗い気持ちにな  
ってしまいますよ。

小野　　そうそう、作業などは意欲的に取り組ん  
でいますしね。

主任　　確かに、英語でも時々、単語調べに集中  
している時もあるな。

山本　　国語でも漢字の練習などは集中している  
時がありますね。

川口　　集中している時の晃治君って、何かいい  
ですね。集中するようになれば、自然  
と問題行動も減るんじゃないですかね。

#### <解決像実現のためのリソース探し>

主任　　晃治君の出来ていないところばかりでな  
くて、結構やれているところもある事が  
分かったですよ。

山本　　確かにだめなところにはばかり目がいつて  
いたけれど、そうでもなさそうですね。

小野　　女の子にはやさしいとか、作業的な学習  
では集中する時があるとか・・・。

川口　　体育の授業では、授業のムードメーカー  
らしいですよ。

主任　　晃治君が、集中して取り組む場面が増え  
るように授業を工夫してみませんか。と  
りあえず、今日の話し合いのメンバーで、  
半月間やってみましょう。

#### <小さな変化を起こす>

晃治君の集中力を高めるために、授業ででき  
そうな工夫を考え、各先生が取り組んでみまし  
た。以下は、各先生方の取り組みです。

○ 主任の佐藤先生は授業中、単語調べのプリ  
ントをA4判(20語)1枚から手のひらサイ

ズ(5語)4枚に変更し、1枚ごとにチェッ  
クを受けて次のプリントに進むようにしまし  
た。

○ 川口先生は、今まで機械的に指名していた  
のを、本人にできそうなところを予告して指  
名してみました。

○ 小野先生は、授業の初めに作業の時間を作  
るようにし、晃治君に助手として手伝っても  
らうようにしました。

○ 山本先生は、50分の授業を10分程度の内容  
に区切って実施してみました。

#### <成功例を活かす>

半月が過ぎて、各先生方の取り組みについて  
話し合われました。うまくいったものばかりで  
はなかったのですが、成功例もかなり見られま  
した。

主任　　私は、プリントの大きさを小さくして、  
その分、枚数を増やしてみたのですが、  
これは成功でした。1枚完成する度に本  
人を褒め、次のプリントに移るので、本  
人の集中力とやる気が以前よりアップし  
たように思います。

川口　　なるほど、1回の分量を減らして数回に  
分けるのですね。分量は同じでもその実  
施の仕方を工夫したということですね。

山本　　1回ごとの分量が少なくなれば、学習の  
進度も他の生徒とそんなに差が開かない  
ですよ。また、その度ごとに褒めると  
いうのも本人のやる気を高め、集中力ア  
ップにつながりますね。私は、授業時間  
50分を意識的にいくつか区切ってみた  
のですが、これは本人だけでなくクラス  
全体にも良かったのではないかと思います。

主任 授業にめりはりができて集中しやすくなりますよね。

川口 生徒も今何をすればよいのか分かり、集中しやすいですね。

山本 ただ、漢字調べを毎回5分やってたんですが、少し欲張って15分やった時があったんです。その時は、晃治君は投げ出してしまいました。

小野 作業的な学習をする時は、時間とか分量とかが大切そうですね。私は、授業の初めに作業の時間を取り入れ、晃治君には助手として手伝ってもらいました。手伝ってくれる時は授業に集中している場面が多かったのですが、そうでない時はなかなか集中できませんでした。今度は、川口先生のように事前に手伝ってもらう内容を話しておいてみようかなと思いました。

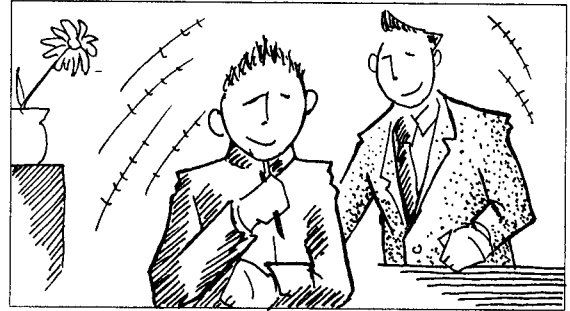
主任 工夫次第で大分変化するものですね。もう少し継続してやってみましょう。

話し合いを繰り返す中で、晃治君のプラスの面での変化に注目がいくようになりました。また、担任の山本先生や各教科の先生は、晃治君の少しの変化に対して励ましの言葉をかけるようになりました。

担任の山本先生は、当初は、本人との面談の際には、何をどう話していいものかと悩んでいました。だめなところを指摘するのではなく、出来ていることについて認めたり、頑張れた理由について尋ねたりするようになり、晃治君とのやり取りも少しずつ円滑に行えるようになってきました。

このような指導援助を通して、晃治君の表情も明るくなり、学習面だけでなく生活面でも徐

々に落ち着きが出てきました。佐藤先生は、自分たちも晃治君も以前に比べ少し元気になったように感じています。



## 7 おわりに

今回は、努力しているにもかかわらず指導援助がうまくいかない時、あーどうしようと思いついた時に、元気の出る生徒指導の発想について、チーム援助の考え方や解決志向アプローチの視点から考えてきました。援助例でみてきたように、出来ていないことのみとらわれず、出来ていることを複数の視点で注目することによって、生徒自身や生徒を取り巻く環境の中には、解決像のイメージの素や援助に役立つリソースがあることに気付かされます。解決像をイメージし、リソースを活かしながら今できる援助を行っていくという発想は、生徒の肯定的な側面に焦点をあて、生徒の持つ良さを引き出すという点で、生徒の変容がとらえやすく、生徒と教師双方のやる気と自信を高めていくといえるのではないのでしょうか。

### ◇ 引用・参考文献

学校教育相談ハンドブック 福島県教育資料研究会編  
学校心理学 誠信書房  
チーム援助入門（学校心理学 実践編） 図書文化  
ブリーフ学校カウンセリング ナカニシヤ出版  
解決志向ブリーフセラピー ほんの森出版



## 平成16年度 福島県教育研究発表大会報告

# ふくしまの“まなび”を 共に創ってみませんか？

平成17年2月10日(木)、「平成16年度福島県教育研究発表大会」を福島県文化センターと福島市音楽堂の2会場で開催した。

福島県教育委員会教育長、福島県小学校長会会長、福島県中学校長会会長、福島県高等学校長協会会長をお迎えし、開会行事を行った。

全体会では、まず、産業能率大学教育コンサルティング部主任研究員の浅野良一先生に「組織マネジメントから考えるわが校の特色づくり」と題して講演をいただいた。



組織マネジメントとは何か、学校組織の特徴はどこにあるかを押さえた上で、学校の特色づくりに向けた学校の内外環境の分析、学校の特色の具体化について、ホワイトボードを駆使しながら、熱のこもった講演が行われた。参加した先生方は、講演の内容に感銘を受け、それぞれの学校づくりに生かしたいと感じた様子がアンケートよりうかがえた。

続いて、小学校と教育センターの全体発表が行われた。午後は5分科会に分かれ25の研究発表が行われた。

### 〈全体発表〉

児童とともに創る大島のけやきっずタイム  
～人と「出会い」「ふれあい」「成長する」  
児童を目指して～  
郡山市立大島小学校 教諭 宗形 潤子

児童が自ら学び、自ら考える力を育成するために、学級・学年を超えた活動・交流、自分や



友達の良さを振り返る場の設定、地域や保護者との連携など、人とのかかわりを積極的・意図的に設定した取り組みが発表された。さらに、身に付けたい資質・能力の明確化と評価規準の作成・活用、教科との連携を図るための一覧表の作成など、「確かな学力」を身に付けるための工夫が必要であると述べた。

### 子どもの学びを支援するシラバスの研究 と開発

県教育センター 所員 安瀬 一正

シラバスの意義や目的、シラバス作成の手順や活用の仕方、事例などについて発表が行われ



た。(詳しい内容は、9～11ページを参照)

## 分科会発表

### 【第1分科会】学校評価・教科外教育

#### 次の活動への意欲を高め、自発的・自主的な活動を促すための評価のあり方

～学級活動での児童の振り返りを通して～  
本宮町立五百川小学校 教諭 小林 真一

4年生の学級活動において、事前・話し合い活動・本活動後にそれぞれを振り返る学習カードを工夫するなどして、自らの活動を児童に主体的に振り返らせるとともに、意欲付けを図り、次の活動へとつなげていく評価活動の実践が報告された。

#### 共に学び、共に高め合う子どもの育成

～教科等の学びを生かした生活科・

さくらっ子タイムを通して～

福島市立佐倉小学校 教諭 佐藤 裕子

教科の学びと生活科・総合的な学習の時間等とのかかわりを図る工夫、さらには地域の自然・文化・人々とのかかわりを重視した学習単元の開発等を通して、子ども自らが自他のよさに気づき、共に高め合うことを目指した様々な全校的な取り組みが報告された。

#### 学習に対して自立し、確かな学力を身につけた生徒を育てる数学科指導のあり方

～学校、家庭の相互理解の深化と、

少人数学習の改善を通して～

県教育センター 所員 山口 智

「学習の手引き」「数学科通信」等を発行する

ことにより、生徒や保護者に対して数学科指導についての理解を深めたり、数学の少人数学習において、学習形態・学習ステップ別のコース学習を工夫するなどして、学習に対して自立した生徒を育てる指導の工夫について実践報告がなされた。

#### 学校の自己評価と外部評価

～学校評価モデル事業の実践を通して～

県教育センター 所員 鈴木久米男

本年度、「学校評価モデル事業」が県立学校で実施されている。モデル校に指定された「外部評価委員による外部評価」7校と「学校評議員による外部評価」7校による実践成果と今後の研究の在り方について報告がなされた。

#### 好間高等学校における自己評価及び学校評議員による外部評価実践

～学校評価モデル事業として～

県立好間高等学校 教諭 堀越 弘治

本年度、「学校評議員による外部評価」のモデル校指定を受けて、自己評価に加えて外部評価も行ってきた。自己評価への取り組みを通して教職員の意識の高まりが見られたことや、学校評議員とのかかわりを深めることにより学校評価の実効性をより高めることができたことなどが報告された。

【第2分科会】生徒指導・教育相談

健康相談活動を通しての校内連携について

西郷村立西郷第一中学校 養護教諭 梅原マサ子

養護教諭の立場から、健康相談活動を通しての校内連携について発表がなされた。問題把握のための「今日の健康状態」等の諸資料の活用、定期的な会議や随時の連絡による情報の共有化、個々の生徒の問題に応じた支援チームによる指導援助の実際等、「連携」のためのヒントが数多く得られる発表であった。



特別支援教育推進体制モデル事業への取り組み

川俣町小中学校（代表）

川俣町立川俣小学校 教諭 佐藤 淳子

平成15年、16年の2年間にわたる川俣町の本事業への取り組みについて発表がなされた。町校長会、特別支援教育コーディネーター連絡会議を中心とした町全体の実践、川俣小学校における校内委員会、特別支援教育コーディネーターを中心とした学校としての実践等、今後の特別支援教育へ示唆に富む発表であった。

心の健康を重視した教育活動はどうあればよいか

～ストレスマネジメント教育を柱とした心

の健康教育の工夫～

いわき市立小名浜第一中学校 教諭 小野 昌久

ストレスマネジメント教育を柱とした心の健康教育の実践について発表がなされた。日課表に位置づけられたストレスマネジメントタイム（週2回実施）、実技講習会（年2回）、教師対象の実技研修会の実際、生徒の保健室利用者数の減少等の成果について説明があり、心の健康教育の重要性を再確認できた発表であった。

総合的な学習の時間における人間関係づくりの実践

県立安達東高等学校 教諭 木村 忍

総合学科第2学年での総合的な学習の時間における人間関係づくりの実践について発表がなされた。5時間枠のコミュニケーション演習、学級を解体した学習グループ編成、TT方式による指導体制づくり等の実践は、集団への適応能力の育成に結びついており、卒業後の早期離職防止等にも効果が期待される発表であった。

生きる力を育てる授業実践プログラム開発に関する研究（第2年次）

～学級（ホームルーム）活動を中心に～

県教育センター 所員 安田 浩子

県立湯本高等学校 教諭 加藤 香洋

小学校第4学年、中学校・高等学校第2学年における授業実践プログラムの開発と普及について報告がなされた。また、高等学校での授業実践プログラム開発の意図、実際、成果について発表がなされた。学級（ホームルーム）活動を通して、予防・開発的な視点から「生きる力」を育てるプログラムが提示された。

【第3分科会】情報教育・情報化推進

**学習における IT 活用とその支援のあり方の研究開発**

県教育センター 所員 **鈴木 稔**  
三春町立沢石小学校 教諭 **菅野智香子**

「箏による創作学習」（音楽）、「ふるさとの祭り・芸能について探ろう」（総合的な学習の時間）を題材に、専門家の協力を得てオンデマンド教材の開発や掲示板による情報交換など、小規模校を対象に学習支援を行った。これらの実践研究を通して、学習における IT 活用のモデルと支援のあり方を明らかにすることで、「IT を活用したわかる授業」を一層普及させる要件について報告された。

研究協力校から「この学習を通して理解が深まり、児童の発想や表現が広がった。」という感想が紹介された。



**児童支援のための応用的な校内 LAN 活用について**

富岡町立富岡第一小学校 教諭 **山田 徹**

校内 LAN が整理された環境で活動のふり返りや自己評価を行う道具としてタブレット PC などの情報機器やデジタルコンテンツを活用し、児童の「思考力の高まり」や「知識の理解や定着」を図ることを目指した実践が報告された。



**中・高・市教委の連携を基にした IT で築く学力向上プロジェクト**

～児童生徒の英語リスニング力獲得に向けた会津若松市の取り組み～

会津若松市立一箕中学校 教諭 **小林 香織**

会津若松市内の中・高等学校の英語担当教員が連携し、英語教育のあり方や中・高の学習の接続などについて話し合い、実際にリスニング教材等を作成して、インターネットで配信することで、学校や家庭における学習機会の拡充を目指した取り組みが報告された。



**マルチメディア教材を使った授業の試み～郡山市市街地再開発計画～**

県立郡山北工業高等学校 教諭 **池上 邦彦**

郡山空間設計という建築科の課題をより現実的なものとしてとらえさせるため、身近な生活圏の「郡山市市街地再開発計画」をテーマに、フィールドワークにマルチメディア機器を積極的に活用した2年間の課題研究の試みが報告された。



**4年間の情報教育を通して～情報社会におけるモラルの向上を目指して～**

県立安達高等学校 教諭 **高橋 寛二**

教科「情報」において、情報化社会に適應できる技術と考え方を身につけさせるためには、課題をどのように解決するかを考えさせたり、より具体的な身近な例を用いたりすることが大切で、このような指導の結果、著作権に関する意識に改善が見られたという実践が報告された。



【第4分科会】 教科教育

**個の学習適性に応じた物語の読解指導は  
どうあればよいか**

月舘町立小手小学校 教諭 花輪 忠康

「ごんぎつね」を題材に、適性交互作用（クロンバック）の理論に基づき、児童の学習適性（抽象言語型、感覚運動型）に応じた読解指導を工夫し、指導と評価の一体化を図りながら、一人一人に確かな読みの力をつけさせる実践を行った。抽象言語型の児童にはキーワードに着目させながら言語的思考や論理的思考を高め、感覚運動型の児童には場面絵や実物を補助的に扱いながら、内容を把握する力や想像力を高めさせることができた等の成果が報告された。

**理科が大好きな子どもを育成するために**

～自ら「感じ・考え・実感する子ども」の育成～

福島市立岡山小学校 教諭 山本 巖

平成15、16年度「理科大好きスクール」の指定を受け、理科学的な環境整備と授業実践に取り組んできた。本年度は知的好奇心を促す環境づくり、日常生活との関連、日々の授業の充実の3つのアプローチから「理科が大好きな子ども」を育成するための研究を行った。研究を通して問題解決意欲を喚起する授業展開が図れるようになった、すべての学年において「理科が好きになった」という割合が増加傾向にある等の成果が報告された。

**作業的・体験的な学習を通して、地理的な  
見方・考え方を育てる学習指導のあり方**

～身近な地域の調査において～

県教育センター 所員 山崎 浩之

地理的な見方・考え方の基礎を育成するため、身近な地域の調査において新旧地形図の比較や地域調査、地図化によるまとめの工夫等、作業的・体験的な学習を取り入れ授業を実践した。

それぞれの活動に対して適切な支援（手引きの活用）を行うことにより、地理的事象を見だし、その事象を多面的、多角的に追究することができた。それにより地理的な見方・考え方の基礎が育ち、生徒の学習意欲を高めることができた等の成果が報告された。

**リスニング力の向上を目指した速聴学習の  
実践的研究**

～学習者の語彙サイズとの関連を通して～

県教育センター 所員 黒須 智則

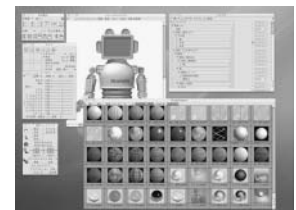
中学校3年生を対象に速聴教材（1倍速・2倍速・3倍速）を作成し、視聴音読学習を実践した。リスニング力と語彙力を見る指標としてリスニングテストと語彙サイズテストを実施した結果、両者に相関があり、事後にはかなりの相関傾向が見られた。成果として、語彙サイズ1700以上の学習者に、より効果が見られたこと、リスニング力を向上させるための授業改善の視点を明確にできたこと等の成果が報告された。

**「映像メディア表現」における3DCG作品  
の制作に関わる研究と先進校での実践事例  
について**

県教育センター 所員 片平 仁

中学校、高等学校美術科において取り入れられた「映像メディア表現」の手法として3DCGを取り上げ、3DCGによる作品を制作するために必要な事項と先進校での指導事例を示し、教育現場への提言とすべく研究を行った。

3DCG作品制作の実際、先進校における卒業作品の紹介とともに、3DCG制作が持つ可能性と、絵画や彫刻、日常の観察や気づき、素描力の重要性を再認識することができたという報告がなされた。



【第5分科会】 カリキュラム開発

「ふくしまの学習意識」に関する調査研究  
(第2年次)

県教育センター 所員 中目 雅彦

小・中・高等学校の児童・生徒・保護者4,858件を対象に調査し、「生活状況」「学習に関する意識」「保護者の子ども観」「教育行政への要望」の4観点で調査結果をまとめた。福島県の児童生徒は基本的な生活習慣や手伝いをよくしているが、読書時間がやや少なく、成績が向上したとき学習してよかったと感じ、中学生・高校生では自分の学習の時間や仕方に不満をもつ生徒が増え、こんな仕事がしたいという児童・生徒が増えている等の実態が報告された。報告書は3月始めに各学校に送付の予定である。

生徒一人一人に「確かな学力」を身に付けさせるための指導方法・指導体制の工夫

常葉町立常葉中学校 教諭 関根 宏房

3年間の「確かな学力」の定着のための研究の中で、習熟度別のコース学習や、学習シラバスを活用した予習、単元学習ノートを活用した授業の実践を行った。その結果、生徒の家庭学習の量が増え、授業の展開が速くなり、扱える問題数が増えたり発展的な学習が進めやすくなったりする状況ができ、NRTの平均偏差値が4ポイント以上上昇した等と具体的な成果が報告された。

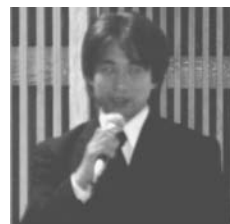


国際感覚を育てる国際理解教育はどうあればよいか。～英会話力の育成をめざして～

河東町立河東第三小学校 教諭 木野 善弥

6年間の英会話活動の実践の積み重ねにより、学級担任が前面に立ち、ALT やインストラクターとTTを組み、目的意識を持たせたしかも

楽しい学習活動が可能になった。「この場面なら英語で話せる」という自信を持たせ発達段階を考慮し中学校の英語の学習との関連を意図したスキットの開発、English Day や朝の会での英語の歌等英語に親しませる日常指導、英会話力の向上を図る評価の工夫、職員研修に取り組み、児童の英会話力が向上しているとの報告がなされた。



問題解決学習において自己評価能力を高める学習指導の工夫 ～小学校社会科における単元シラバスの活用を通して～

県教育センター 所員 高橋 政喜

中学年と高学年における学習到達目標と評価基準、自己評価した結果をその後の学習に生かすための情報を明示した単元シラバスを開発した。学びを支援する単元シラバスを活用した授業の実践により、児童の自己評価能力が高まり、学び方も身に付けてきた等の報告がなされた。



教育課程(届)調査研究

県教育センター 所員 滝沢 玲子

公立小・中学校、県立高等学校全校の教育課程を調査し、小学校においては日課表の工夫、中学校においては選択教科の工夫、高等学校においては生徒選択履修の工夫について、学校の自主性・自律性が見られた。努力事項や教育課程編成の工夫を具体的に明らかにして、年間指導計画や日課表等に反映したい。教育課程調査結果報告書小学校編(1月25日発行)と中学校編(2月7日発行)を活用して欲しいとの報告がなされた。



暮らしの中から心穏やかな作品を創る

陶仏・墨絵作家

## 木村 信子氏に聞く

木村さんの作るお地蔵様や観音様は、見る人の心を柔らかくします。浪江町の豊かな自然に囲まれたアトリエを訪ねました。

### ■子どもの頃の夢は・・・

小さい頃から「私は絵描きになるんだ。」と言っていました。疑いもなく。お小遣いをもらうと、お菓子を1個買ってくじを引いて、残ったお金で更半紙を買っていました。紙がいっぱい買えるのが嬉しくて。たまに白い高い紙を買って。描くことが、ほんとうに好きでした。

### ■陶仏を作り始めたきっかけは・・・

お地蔵さんを作ることを勧めてくれたのは、高校の時の美術の先生です。美術部の教材としてみんなで作ったときにいいと言われて。たまに勧められたことですが、自分でもいちばん合っているかなと感じています。

顔の表情は、作っているうちに自然にできてきます。作りたいものを作る。自分の苦しいときほど没頭できるというのがあるし、それによつての困難は困難と思わない。好きなことは、苦しいと思わないのではないのでしょうか。

### ■今めざしているものは・・・

お地蔵さんの他にいろんなことをやって、もっと別のことを吸収したいなあと思っています。それが無意識に作品に出てくればいい。売ることに関してはプロにお任せして、作家としてというよりは、自分としての時間を大切にしたいと思うので、そのペースに合わせて作品を作って、蓄えたいと思います。



自分から前へ前へ出てはいないので、周りに恵まれていると思います。家族のフォローがあって、認めてくれる人がいて。ありがたいです。だから、周りにいる人に迷惑をかけないようにしながら、自分を作っていくと思っています。ものじゃなくて自分を作っていくって初めてものができるような気がするのです。

### ■伝えたいことは・・・

1つの好きなことがあったらとことんやっていくのはすばらしいことなんだということは、子どもの頃から伯父を見ていて感じたことです。前向きな考えとか、人にはこういうふうに気を遣うんだとか、こういう大人になりたいというのがありました。

子どもたちにも、自分の好きなことを見つけ、その中で人間関係も自分で作っていくって欲しいなと思います。自分の好きなことを通して人付き合いがふくらんでいくような。「これだけは」というものを見つけた子は幸せですよ。あんまりがむしゃらに自分自分でも困るけれども、譲れないと思うものを曲げないで、周りの人と円滑に生きていける、そのへんのバランスをとりながら。





# 長期研究を終えて

広野町立広野中学校 教諭

**猪 狩 孝**

(平成15年度長期研究員)

## はじめに

教師になって11年目、振り返ってみると、目の前の仕事をこなすのに精一杯で、学校を取り巻く社会情勢の変化や今日的な課題に目を向け、じっくり考えることなくここまで来たように感じます。平成15年度の1年間、長期研究員として、自分のテーマについて研究する貴重な時間をいただいたことは、今後の教師としての自分の在り方や生き方を考える上で大変貴重な時間になりました。

## 研究主題として

1年間という限られた時間の中で、自分のテーマとして学校教育相談を選びました。現場で当面していた問題の多くが、生徒の人間関係の希薄化に起因するものだと感じたからです。各種調査や研究に関する文献などを調べたり、研修に参加したりすることを通して、細切れで漠然としていた自分の中の問題意識が明確になり、子ども達に育ててあげたい力が見えはじめてきました。

## 生徒の人間関係と教育相談的手法

少子化や情報化社会の進展などの社会情勢の変化は子ども達にも大きな影響を与えています。子ども達の人間関係は希薄化し、対人関係や集団生活に支援を必要としている生徒が増えてきていると言われています。教育相談的手法は、対人関係の中で人の心の温かさや、人と接する楽しさを感じ取らせていく1つの手段として大変有効です。

## 教育相談的手法を実践して

研究協力校では、実践前に比べ、友人や男女

間での人間関係の深まりが見られ、自己理解の深まりと共に、互いの違いを認められる雰囲気が高まってきているのが、担任の先生からの感想や事後調査に表れていました。実践にともない、生徒の人間関係が円滑になり、人と接する楽しさを感じているとの感想が多くなってきたことが大変嬉しかったです。

## 研究の成果を生かして

現任校では、学年主任の立場で担任の先生方と教育相談的手法の研修会を行ったり、学年集会でグループエンカウンターを実践したりしています。学級での実践前に研修会を行い体験しておくことで生徒の抵抗を予測できますし、互いにいい勉強になります。また教育相談的手法を学んだことで、私自身生徒理解の幅がずっと広がったように感じています。

## おわりに

昨年度1年間の生活の中では、テーマを絞り込み追求しながらも、新たな視点をもち先入観なしに視野を広げ、様々なことを吸収するよう意識しました。研究室の仲間は、校種や教科もさまざま、それぞれの立場で、学校が直面する問題や社会情勢、各自の研究やその着眼点などについて意見を交わすことができました。センターでの多くの方々との出会いや語らいが、今後の教師としての在り方や生き方を考える上で、とても貴重なものであったと感じられます。

大変恵まれた貴重な時間をいただいた恩に報いるよう勉強し、今後も、その内容が現場の先生方の少しでも役に立つように努力して参りたいと思います。

# 専門研修から

教育センターでは、今年度、48の専門研修を実施しました。専門研修に参加した先生は、のべ1,985名。「専門研修が完全希望制になってやっと参加できました。望んでいた研修だけに、前向きに取り組むことができました。」「最近他の仕事に追われて研修することを忘れていたように感じる。今回研修に参加して、非常によかった。」こんな感想をいただいた、専門研修の様子をいくつか紹介します。

## ●教科外教育

道徳、特別活動、マネジメント等8講座を実施しました。

【組織マネジメント講座：校長対象】



産業能率大学主任研究員・浅野良一先生による講義が行われました。演習に取り組む校長先生も真剣です。

## ●教科教育

小学校現地研修4講座を含む18講座を実施しました。

【中高社会】



向鎌田のハウス等のフィールドワークを行いました。「聞いてみて初めて知る事実も多く、地域調査の重要性

を改めて認識しました。」

【中学校技術・家庭講座】

「家族と家庭生活」における実践的・体験的な学習活動を取り入れた授業づくりについて研修を行いました。

「人を育てる根本的な目的が伝わる愛情のこもった講義でした。」



## ●教育相談

基礎講座、実践講座等4講座を実施しました。どの講座も実践的な協議や演習を行うとともに、

筑波大学教授 岩隈利紀先生、早稲田大学教授 菅野純先生といった多くの外部講師の講演が行われました。



## 著名な講師による講義（講演）を聴講してみませんか

平成15年度から始まった外部講師聴講制度。16年度は、のべ91名の外部講師の講義・講演に対して、のべ506名の先生方が聴講に訪れました。17年度の研修も、充実した講師陣で先生方をお待ちしています。

ずいぶん昔のことだが、新聞に「超〇〇」ということばについての記事があった。おもに若者が使うそのことばを評したものだたと記憶しているが、印象に残っているのが、そこで「超現実的」ということばをあえて話題にした少し皮肉めく書きぶりだった。

「超〇〇」というときの「超」は「とても」とか「この上なく」の意味で使われているようだが、「超現実的」の「超」はそうではない。もしそうならば、「超現実的」は、「とても現実的」ということになるわけで、もともとの「現実を超越して想像を中心とする行き方・傾向」、また「現実離れしたさま」という意味とは正反対の意味を表すことばであることになってしまう。

そうまで甚だしくなくとも、いつごろからかは知らないが、「鳥肌が立つ」、「慄然とする」などのことばの扱われ方が妙な具合になってきている。そもそも、前者は「寒さ」や「恐れ」が前提になることばであるし、後者は「がっかり」や「驚きあきれる」の意がそのもとにある。勘違いなのか、意図的なのか、ともかくも、本来と異なる扱われ方を耳にすることがよくある。それもテレビにおいて印象的である。

ことばは変わっていくもので、意味も扱われ方もいつまでも不変ということはない。どうにも抗しがたい変化の流れのようなものもあるだろう。むしろ、どんどん移り変わるさまをそのまま受容してよいとする向きさえある。だが、もしもそれまで使っていたことばの意味がまるで逆さまになったとしたら、あるいはひどく方向違いになったとしたら、それも必然のわけがあることならまだしも、それほどのこともなくてそうなったとしたら、それはとても困る

し、ときに不愉快なことにもなるだろう。ことばが変わる、または変えられることに対して、いくらなんでも、というごく普通の感覚を働かせることの意味についてふと考えてしまうのである。いくつか掲げたことばはそのきっかけになる例である。

日本語の混乱する今のありさまを見て、憂いを語る人がいる。日本語が消えていく、であったか、日本語が壊れていく、であったか、どちらかの趣旨でそれを論じたテレビのニュースキャスターがいた。日本語の現況に対する論評としてさすがと思わせる話であり、同感しながら聞いたことを覚えているが、ただ、そのとき少しもの足りない思いを感じたのも打ち消しがたく、それはこんな思いであった。

テレビが人々を動かす力は大きくて、そこから意味あるメッセージを送り、人々に動きを促そうというのはよく判る。しかし、翻って、さてテレビ自身は日本語のためになにをなすのかということになるとどうも判然としないのであった。それは、その大きな力から考えればできることはいくつもありそうなのに、という思いでもあった。

ことばもそのひとつである文化の創造、普及には一役も二役も買っているテレビである、という認識はまちがっていないと思うが、それはさりながら、あるテレビの世界にはちょっとちがうこともあって、というようなことにでもなると件の認識もぐらついてくる。それでも、ことばに関して、いくらなんでも、というごく普通の感覚がその世界でせめて無視されることのないようにと願う思いは変わらない。

# PC を活用した教材作成

～資料を読み取る力をつける学習教材の作成～

河東町立河東第三小学校 教諭 棚 木 清 人

## I 教材作成の趣旨

社会科の学習で、子どもたちに資料を読み取る力をつけたい。そんな願いを持って、PC教材を活用した支援を考えてみた。子どもたちが自分で学習したことを確認しながら、なおかつ資料を読み取り、自ら考えることができるようにしたいと考え、このような学習教材の作成・活用について研究を進めることにした。

## II 教材作成の内容

### 1 PC教材作成について

#### (1) 教材の作成にあたり

このPC教材は教育センターで開講している「ITを活用した教材作成講座」において作成したものである。教材作成に当たって、はじめに考えたコンセプトは以下の通りである。

- ① 児童が自分たちで簡単に操作できるものにしたい。
- ② 操作しながら知識・理解を深めていくものにしたい。
- ③ 資料を読み取っていくことで力がつくようなソフトにしたい。

このコンセプトを基に、使用するソフトを考えた結果、いくつかの問題をデータベース的に扱うことになるので「Excel」のデータベース機能を利用して、教材作成に取り組むことにした。

#### (2) 教材作成の実際

「Excel」のマクロ機能を活用して、文章資料を読ませながら資料に関する問題を自動的に出題できるように作成を進めた。

No.	提示資料	01	01_Select	01	02	02_Select
1	沿岸部にいる魚をとる漁業といま す。日本の漁師の8割以上はこの沿岸 漁業を行っています。伝統的に家族単 位で行っている場合が多いのが特色で す。しかし、日本の工業化に伴い、沿 岸部に工場が多くできて魚が減ってき たり、赤潮と呼ばれる漁業問題が起き	Q1.陸のすぐ 近くの海で 行う漁業を 何といいま すか？	1. 沖合漁 業 2. 沿岸漁 業 3. 遠洋漁 業 4. 伝統漁	2	Q2.Q1の漁業 をする人は 漁業にかか わる人全体 の約何割で すか？	1. 2割 2. 4割 3. 6割 4. 8割

- ① 読み取り用の文をテキストで入力する。
- ② 問題とその選択肢を入力する。
- ③ 不正解の場合の解説を提示できるようにする。
- ④ 児童が操作しやすいように、他のボタンなどを表示しないようにする。



#### (3) 新たなソフトでの教材作成

「Excel」で教材の作成を進めていったが、画像などを利用しにくいことに気がついた。保存

した画像にハイパーリンクを張ることも考えられたが、問題数が多くなるとこの作業にも手間がかかることから、「学習クイズ system」（岡崎良介氏作成）というフリーソフトを使い、教材作成を進めることにした。

このソフトを活用することで、文章で問題を提示するだけでなく、写真などの画像ファイルや音声ファイルを、問題と一緒に示すことができるようになった。



このソフトはテキストファイルでかかれた問題を読み込んで、5択型問題や入力型問題を出題できるので、子どもたちは楽しく学習を進めることができる。特徴として、

- ① 問題をテキストエディタで簡単に作成できる。
- ② 画像や音声を利用した問題が作成でき、問題ごとに解説を加えることもできる。
- ③ 正答率が表示され、どの問題を間違えたのか間違い歴を印刷・保存できる。
- ④ 間違えた問題にもう一度取り組むことができる。

といった点がある。

「5年社会科」や「6年理科」など問題のジャンルごとにテキストファイルを作成して、多くの問題を蓄積すれば、問題のデータベース化にもつながる。

ただ、画像は決められた大きさでしか表示されないため、画像を利用するときは元の画像の大きさを修正する必要がある。この点については、作成者とメールで情報交換を行い、今後、対応していきたい。

### Ⅲ 教材を作成して

- ① どの問題をどのように出題するかを考える過程で、社会科の資料読み取りで捉えさせるべき事項を深く考えまとめることができた。
- ② 「Excel」やフリーソフトのさまざまな機能を目的に応じて使い分けることで、授業のいろいろな場面で活用できることがわかった。
- ③ このような教材を利用するときは、楽しさのあまり授業への取り組みがおろそかにならないような配慮が必要である。
- ④ さまざまな児童に対応するために今後も内容を充実・改善していく必要がある。



### Ⅳ 終わりに

「ITを活用した教材作成講座」は年3回（7日間）の講座であり、教材作成の計画から作成まで一人一人の考えを生かし、その実現に向けて援助していただいた。このような機会は大変有意義であり、もう一度、受講してみたいと思った。そして多くの先生方にもぜひ受講していただきたい講座であった。



# 学校での箏・三味線の取り扱いについて ～楽器の借用を踏まえて～

教育センター 教科教育チーム 指導主事 石川千穂

## 1 はじめに

学習指導要領の改訂で和楽器や我が国の伝統音楽の取り扱いが重視されるようになり、現在では小学校でも箏や和太鼓などの和楽器が授業に取り入れられるようになりました。

一方で、高価な和楽器を各学校に必要な数だけ購入することは難しく、近隣の学校などから借用する機会が今後、ますます増えることが考えられます。ここでは、学校での箏と三味線の取り扱いについて、楽器を借用する場合を踏まえて大切な点を確認します。

## 2 箏の取り扱い方

箏は比較的丈夫な楽器で、取り扱いも簡単ですが、一斉授業で使用する場合にはやはり注意が必要です。

### ①楽器本体の取り扱い

#### ○楽器の運搬

楽器を借用する場合、楽器を運ばなくてはいけません。専門の業者に依頼しなくともワゴン車があれば自分で運ぶことができます。楽器を積み重ねても大丈夫ですが、楽器と楽器の間に毛布などをはさみ、下の楽器の糸が直接上の楽器の糸に当たらないようにします。そうしないと、糸ですれて箏の裏面に傷がつきます。普段、持ち運ぶ際には、ぶつけないように気をつける



ことが大切です。材質が柔らかいため、すぐに傷になります。

### ②付属品の取り扱い

#### ○爪

授業では、着脱の際は必ず輪を持って行うことを最初に指導します。爪の部分を持って抜くと、のりで輪に固定されているだけなので、すぐにとれてしまいます。爪はとれても、輪に糊でつけないおせば、爪自体が欠けたり減ったりしてしまわない限り何度でも使えます。



#### ○柱

粗雑な扱いをすると縁が欠けます。床におとしたり、柱箱に入れてガチャガチャ振り回すなどせず丁寧に扱うように指導します。また、調弦中などに柱を倒すと箏の表面に倒し傷がつきます。調弦などで柱を立てるときは、必ず柱の足の部分を持つように指導します。きちんと指導されている先生の学校の箏には柱の倒し傷が一つもありません。



#### ○口前袋・猫足

箏の頭の大切な部分「竜頭」を保護している口前袋は演奏家でも演奏会本番しかはずさないものです。普段の授業ではつけたままで良いでしょう。逆に猫足は演奏会の時だけ専門の楽器屋さんにつけてもらうものです。学校では柱箱などを利用することで充分です。

### 3 三味線の取り扱い方

箏に比べて、三味線は大変デリケートな楽器です。取り扱いには十分な注意が必要です。

#### ①楽器本体の取り扱い

##### ○楽器の運搬

ハードケースに入っていることが多いので、そのまま運ぶことができます。三味線の皮は湿度の変化で伸び縮みをしたときに破れやすくなるので、自動車の中に長時間放置しないようにします。特に夏の高温多湿の時期は要注意です。

##### ○楽器の保管

ケースを開けると長袋などの布の袋の中にもう一枚胴の部分だけ紙（和紙）の袋に入っています。紙の上にもう一枚ビニールの袋をかぶせている場合もあります。また胴の部分やケ



ースの中にシリカゲルのような乾燥剤が入っていることもあります。これは湿度の変化を押さえるためのものです。借用した楽器の場合は必ず、最初にどのような状態が入っていたか、よく確認してください。また、自分の学校の楽器も湿気を避けるために上記のようにして保管することをおすすめします。

##### ○取り扱い方

三味線は3つの部分が組み合わされています。ぶついたり、落としたりということは論外です。壁などに立てかけておいたものが、床に倒れただけで棹の部分は破損



します。特に気を付けたいのは、棹の先の「天神」の部分です。カバーは決してはずさないようにします。また、胴の表面は皮ですので、湿気を嫌います。また、強く張ってあるため、少しの傷から破けます。表面を手のひらでべたべたとさわったり、筆記

用具や撥などで傷をつけないように指導が必要です。使用後には布で手の触れた部分を良く拭いて汚れと湿気を取ります。

#### ②付属品の取り扱い

三味線には指掛け、膝ゴム、駒、撥とたくさんの付属品が必要になりますが、その中でも壊れやすいものについて説明します。

##### ○撥

落とせばすぐに縁が欠けます。しかも高価ですので、取り扱いには充分注意が必要です。使わない時はケースに戻す、など最初に注意を促します。三味線は左手で勘所を押さえながら、右手は撥で糸をはじくという2つの動作を同時に行うことが最初は難しいので、開放弦で撥さばきだけ、撥は使わず爪弾きで勘所だけ、と学習過程を分けると不注意からくる破損を防ぐことができるでしょう。

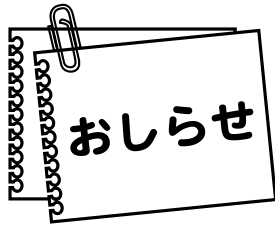
##### ○駒

見るからに壊れやすいものです。後片づけの際に、はずした駒の上に何か置いてしまうなどして破損することが多いので、駒ははずしたらすぐに回収するか、回収しながらその場ではずさせるとよいでしょう。

### 4 最後に

どんなに注意しても壊れてしまうこともあります。借用楽器であれば直して返すのは当然ですが、直す前に破損の状況を借りた相手にきちんと知らせることも必要です。楽器を大切に扱うことは、洋の東西を問わず音楽以前の問題です。和楽器の実技指導は外部講師の先生にお願いすることも可能ですが、楽器の取り扱いについては各学校の担当の先生の責任になります。取り扱いについて正しい知識を持ち、貴重な和楽器を大切にしていきたいものです。





# 実践に役立つ教育資料

—最近の研究紀要・資料から—

センターで受け入れた研究紀要や教育資料から、教育研究や教育実践に役立つ資料をいくつか紹介します。

## 学校の自主性・自律性を確立するための学校経営—教職員集団の資質向上を通して—

静岡県総合教育センター(2004年3月)

学校で必要とされる知識・技能の共有化について、情報の整理や伝承の仕方等を文書の領域・文書を使う目的・文書の使われ方に焦点を絞って調査研究を行い、各学校の工夫事例が紹介されています。

## 学習障害の判断に必要となる心理教育的アセスメントに関する研究

国立特殊教育総合研究所(2004年3月)

基礎的学力のつまずきから、学習障害の可能性の有無を判断できるアセスメントの手法、教育診断的手法の開発についての研究がされています。

## ポートフォリオ評価を活用した指導の改善、自己学習力の向上及び外部への説明責任に向けた評価の工夫—生活、国語、社会、算数・数学、理科、音楽、体育、技術、英語、特別活動を事例にして(第二次報告書)—

国立教育政策研究所初等中等教育研究部(2004年3月)

単元レベルでの学習効果の判定と評価規準の運用及び指導要録とのつながり、指導と評価の一体化及び児童生徒の自己学習の促進に資する評価の在り方に関する研究を行い、基本モデルが提示されています。

## 生きる力をはぐくむ授業の創造—シラバス・学習指導案—

埼玉県立総合教育センター(2004年3月)

児童・生徒、保護者、地域の方々に、学校が行う教育活動を分かりやすく説明し、保護者等からの信頼と協力を得ながら、子どもたちの生きる力をはぐくむことを目的として作成したシラバス8本とIT活用の視点で作成した指導案10本(全校種分)が掲載されています。

※ 教育資料については、企画研究グループ・教育調査チーム(内線14番)までお願いします。また、福島県教育センター Web の検索システムを活用し、必要な図書・文献・研究資料の検索番号やキーワードをご連絡いただければ、こちらで準備し発送します。なお、必要な箇所をコピーで送付することも可能です。

## 平成17年度専門研修のご案内

「研修くん」が紹介する『専門研修 受講者募集』のパンフレットはご覧いただけましたか？  
17年度の教育センターは、今まで以上に「開かれたセンター」「顔の見えるセンター」をめざします。専門研修もさらに充実した内容で開講予定です。

保健の授業を創ってみませんか

### 小・中・高等学校保険講座

健康教育や性教育が話題になっています。小学校から高校までの12年間で「保健の授業を通して何を学ばせるのか」という視点で子どもが意欲的に取り組む授業を考えます。

実践的・体験的学習の充実をめざして

### 中学校家庭講座

絵本作家の先生を講師に迎え、絵本づくりを予定しています。研修に参加しながら、ユーモアあふれる先生から元気をもらってください。

これからは情報モラルが大切です

### 小・中・高等学校情報教育講座

「子どもたちにインターネットを使わせるときの注意は？」「著作権って難しそう」「学校での指導は？」各地区に出向いて、情報モラルの講座を開きます。今年度は、各校1名の参加です。

学級活動でいきいき学級づくり

### 特別活動実践講座

小学校、中学校それぞれに開講します。  
望ましい集団づくりを通じた学級経営の充実が、ますます重要になっています。  
「道徳実践講座」とあわせてどうぞ。

